

---

# 地元の公園は心霊スポット

御園生 久秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地元の公園は心霊スポット

### 【Nコード】

N4413T

### 【作者名】

御園生 久秀

### 【あらすじ】

地元の公園（心霊スポット）の話をひとひねりしました。

学校でのうわさはいつも荒唐無稽だ。体育の伊藤先生が2組の佐藤と付き合っているとか夜遅くになると誰もいない音楽室のピアノの音色が聞こえるなど実に馬鹿馬鹿しい。そんな、適当な話はふざける程度に聞くのはいいが、それを妄信する人間は馬鹿だと思っている。うわさに騒ぐクラスメートを見ながら大輔は一時間目の数学の教科書と宿題プリントを教科書置いた。それを見た隣の席に座る裕也が話しかけてきた。

「大輔。今日も宿題を見せてくれ」

「あいよ」

事務的な動作で大輔は宿題のプリントを渡した。

「いつも悪いな」

「悪いと思うなら宿題やれよ」

「わざわざ苦労したくない」

「なら言うな」

どや顔で言う裕也に対して大輔はそっけなくつつこむと裕也は力リカリと宿題を写しながら口を開く。

「そつえば、俺の家の近くにある自然公園あるだろう」

「ああ、森みたいに木がたくさんある公園だよな。広いから遊具が多いし、池もあるからボートやカヌーもできて暇つぶし程度になるわな」

「そこでまた人が吊っているて聞いたさ」

「ああ、またか」

裕也は何気なく答える。裕也の家の近くにある公園はなぜか人が吊っているとよく聞く。実際はそんなことはない。本当にそんなことがあったのか図書館で新しい年月順に調べてみたが、自分が生まれる前……17年前に首吊り自殺が一度あった以外、そう言ったことは新聞に載っていない。多分、その自殺でそう言ったイメージが

付いたんだろう。おかげでその公園は自殺の名所として噂されるようになった。裕也もそうだった経緯を知っていた。

「まあ、自殺の名所扱いされているけど実際はそんなことはないだろ。他のみんなも調べれば分かることをなんでしないだろうな」

「さあな。昼は楽しい場所だけど夜だと心霊スポット扱い。おまけに池に近づくと池の底へひきづられるて馬鹿な噂があるよな。実際は心霊スポットでもないのにな」

「確かに」

そう言っ二人はげらげら笑うと裕也は何かを思いついた。

「なあ、夜に公園に行かないか？」

「公園？　なんでだ」

「せっかくだから本当に出るか、確認しようと思ってさ……」

裕也はニコニコと笑うが、その笑みに裏があることに気付く。

「なんだ。何か面白いことでも思いついたのか？」

「ああ、あの心霊スポットをだしに女の子を誘わねえ？」

「女の子？」

裕也の言葉に一瞬、理解出来なかったがすぐに理由が分かり、大輔はにやりと口が上がった。

「いいな。それ。どうせ出ない心霊スポットだから俺たちはびびらないし。女の子たちにかっこいいところを見せられるな」

「だろ。おまけに靈感のない俺なら仮に出てきても見ることがないから怖くないだろ」

「そうだな。サッカー部の先輩たちとちよくちよく心霊スポットに行くが先輩たちは見ても俺達は見ないよな。よし、裕也。誰を誘う？」

「やっぱり胸が大きい子がいいだろ。腕を組まれた時に胸が当たって最高だろう」

「OK。なら、俺はサッカー部のマネジャー誘うわ。高校生なのにあれはすごいだろう。軽く、Eはあるんじゃないか。裕也は？」

「俺は委員長を誘うは、制服の上じゃ目立ったないがあれは絶対に

「ある、なによりおとなしいところが俺好みだわ」

「よし、なら今夜にさっそく行こう。他に仲の良いクラスメートでも誘うか？」

「そうだな。夜なのに女子だけを誘うと警戒されるからカップルを一組誘うか。それなら大丈夫だろ」

深夜、大輔と裕也。他にマネジャーの汐莉と委員長のゆかり。それから違うクラスのサッカー部とその彼女……それと裕也が誘ったと思われる女の子がおり、計7人がいた。

その女の子は白いワンピースを着ていてセミロングでおとなしそうな子だった。胸は小さかったが、白くきれいに整った顔は大輔好み。マネジャーより、その女の子の方が気になった。

「その君、名前なんて言うの？」

大輔の言葉に彼女は反応する。少し遅れながら彼女は答える。

「笹本静香」

静香はそのまま黙った。おとなしい性格で裕也好みと大輔は思いながら耳元で裕也に言う。

「可愛い子だな。ところで一人余っちゃてるけどどうする？」

「別に気にしなくていいだろう。他のクラスから来たカップルなんてもう二人の世界に入っているし、適当に合わせれば問題ないだろ」

「それもそうか」

「そうそう。それじゃみんな公園に入ろう」

裕也の号令でぞろぞろと公園に入る。先頭を大輔と裕也にその後ろに静香。その後ろにカップルで固まり、女の子達はマネジャーの汐莉は大輔の左隣、委員長のゆかりは裕也の隣にいた。

真っ暗な公園の中には外灯がなく、森の中のため、月の光は届かず、明かりはそれぞれ持っている懐中電灯が頼りに首吊り自殺されたという木へ移動する。

「大輔、木の方を見終えたらどこに行く？」

「そうだな。池の方でも行ってみるか？ 一応、馬鹿らしい噂もあ

るし？」

「そうするか」

裕也の言葉に大輔は返した。そろそろ首吊り自殺をしたところに着く。どうせ見ないだろうと大輔は思った時、『どさ』と……何か物音が聞こえた。

「なんか変な音がしたな」

「もしかして幽霊出たのかな？」

そう言っただけ裕也は両手をつきだし、幽霊の真似をした。女子たちはそれを見てきゃきゃ騒いだが、静香だけが無関心そうな顔に大輔は気になった。

そして、物音したと思われる場所……首吊り自殺した所に着いた。そこには黒い物体が宙を浮いていた。懐中電灯でそれを照らす。そこには男が……ぶら下がっていた。

……周りは静かになった。いや、声を失った。見てしまった首を吊っている姿を……横顔から苦悶の表情を浮かべていた。

「きゃあ！……！」

声に反応して周りはパニックを起こした。裕也は声を張り上げ、「落ち着け」と叫ぶがそんなのは聞こえず、しゃがみこんだり、泣きだすもの……事態は収拾できなくなっていた。

大輔も裕也と一緒にみんなを落ち着かせようとした。すると、吊られた木の方からギンギンと物音がした。大輔は恐る恐る振り向く……無風な森に男は振り子のようにゆらゆらと揺られながら大輔達の方を向きはじめ、口が裂けてしまいそんな邪悪な笑みをした。

「逃げるぞ」

裕也の声に周りは動こうとする。大輔も本能的にまずいと感じた。隣にいる奴と手をつなげ、はぐれたらまじで笑えね」

大輔の言葉に手をつなごうとするが、一部はいまだにパニックになっただけだった。それを見た裕也と大輔は無理やり、手をつなぎ、引張るように公園の外へ走り出した。

「おい、なんか変なのが俺たちを囲い始めてるぞ」

その言葉の後、大輔達の周りに白く光る人型の物体が現れた。それも複数、まるでここから逃がさないように囲っているように見えた。

「とにかく逃げるぞ。こんなところ来たのが間違いだった」

白い物体に捕まらないように無我夢中に走った。そのおかげで無事に公園の外に出ることができた。白い物体も公園の外まで追ってこないようだ。大輔達はその場にへたり込んだ。

「こんなところに来るんじゃないかった」

「全くだ」

息絶え絶えの大輔達だが、唯一、静香だけは平気そうな顔をした。大輔達を一瞥して彼女は口を開く。

「ねえ、池の方に行かないの？」

「はあ、あれ見てそんなこと言うなんて馬鹿じゃねえの。空気読めや」

「そう」

静香の言葉に裕也は反発した。実際、みんな先ほどの恐怖で言葉がない。すぐに帰った方がよさそうだったが、静香は気にせずを背を向ける。

「そうなの、なら私1人だけ行くわ」

そのまま公園の中へ行こうとする。大輔は止めようとするが、何も聞こえないかのように無視した。

「おい、裕也。お前が呼んだ女だろ。止めてこいや」

「はあ？ 俺は呼んでねえよ。大輔が呼んだんじゃないのかよ」

「俺は呼んでねえ。てつきり裕也が呼んできたと思ってたから……  
ということとは他のみんなか？」

そう言っただけのメンバーを見るが、みんな首を振り、口々に知らない。初めて会ったと答える。じゃあ、誰が彼女を呼んだんだ……その疑問に大輔は首をかしげる。すると誰もいない耳元に静香の声がした。

「おしかったな。あなたなら来てくれると思ったのに……クスクス」

朝、俺達は公園の入り口で発見された。みんな朝まで気絶していたようだった。もちろん、この事は親と学校に散々叱られた後、一週間の停学になった。その後、また、あの公園について調べたが、15年前以降。30年以上前に何人もの人があの池で水死体として上がっていたことが分かった。日付が新しい順で調べていたため、15年前の事件が見つけたからそれ以降前の事は気付かなかったのだ。あれ以降、あの公園には行っていない。おまけに水辺は怖くて仕方ない。もし、そこに近づいたら彼女が手招きしてそうだから…

…

(後書き)

地元の公園で自殺名所兼心霊スポットになっていることを思い出したので少し書いてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4413t/>

---

地元の公園は心霊スポット

2011年5月23日10時10分発行